川村家住宅（長野県南佐久郡臼田町）の再生と自然環境を活かした周辺環境整備による地域活性化計画の一試案

関東学院大学大学院工学研究科　秋山 明子

1. はじめに

本計画は古民家の再生活用による川村吾蔵記念館を核として、背後の稲荷山公園の整備と共に、地域の特色の一つである工芸を楽しみ、学ぶための創作活動施設を提案するものである。その活動内容としては以下のような点を考えた。

1. 本住宅（**写真 1**）にゆかりのある彫刻家 川村吾蔵氏の作品の展示（作品：「理想的な乳牛」等）
2. 古民家は既存空間の特性を活かして、複雑な機能の付け足しや改造は行わない
3. 市民の生涯学習並びに工芸を主とした芸術作品の創作・発表・鑑賞の場、またそれらを通した交流の場の提案
4. 市民に限らず、芸術活動を楽しむ幅広い年齢層の人々のための施設とする
5. 稲荷山の歴史的景観・自然景観を活かしたプランニング
6. 公設民営による市民自身の自主管理の実現

2. 古民家 川村家住宅について

2-1 背景と経緯

川村家住宅の歴史的建築と景観を保存しつつ再生・活用していくため、まず始めに 2000 年に黒田研究室によって現況実測調査が行われ、建物の歴史的・建築的価値が明らかになった（**図 1, 2**）。また市民団体「うすだ未来 21」主催の「まちづくりの集い」（2001.2）では、古民家再生を核としたまちづくりに対する活発な意見交換会と、黒田研究室ゼミ生５名による再生活用案が発表された。第２次調査（2001.9）には関東学院大学肘黒弘三研究室も参加し、構造の耐久性などの調査が行われた。このような経緯をふまえ、2002 年 8 月より、基礎部分の改良を中心とした基礎部改修工事が行われた。

2-2 川村家住宅の歴史的・建築的価値

川村家住宅は、中庭を挟んで母屋と長屋門（焼失）・本土蔵・離れ等によって構成されており、江戸後期の天領庄屋の空間構成がそのまま残されている（**図 1**）。

棟札の発見により母屋は 1844 年に宮大工の堀内喜一により建てられたことが明らかになっ

写真 1 川村家住宅　改修前中庭より見る

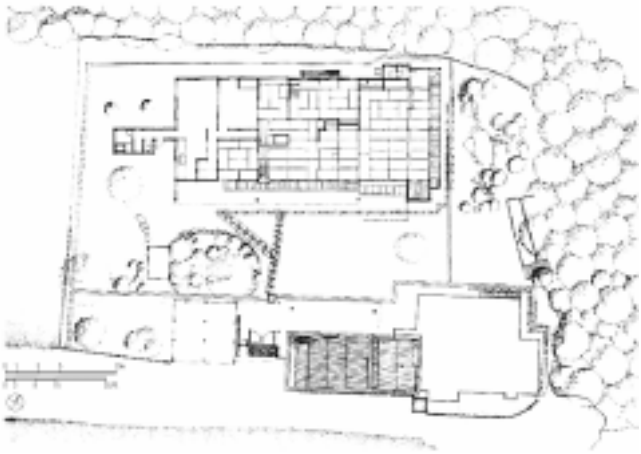

図 1　配置図・１階平面図

図 2　復元 南側立面図

た。唐破風屋根を備えた玄関（**写真 2**）や書院造りの奥座敷には、江戸後期の質の高い建築と彫刻が見られる。また、はねだし造り（**写真 3**）により 1 階が開放した軽快な建築となっている。

背後の稲荷山に武田信玄が山城を築いた時、川村家住宅の敷地には城を守る武士が住んでいた。また鎌倉時代に、一遍上人による踊り念仏がこの地（小田切の里）で発祥したといわれるが、それが同住宅の敷地であった可能性がある。

川村家は 20 歳で渡米し成功を収めた彫刻家川村吾蔵氏を輩出している。彼の代表作としては、「マッカーサー元帥の像」「理想的な乳牛像」などがあげられる（**写真 4**）。臼田町には彼の沢山の作品が保管されている。

以上の点はこの建物が川村家個人のみならず、地域に対して歴史的かつ文化的に重要な価値を持つことを示している。

写真 2　唐破風屋根

写真 3　はねだし造り

写真 4　川村吾蔵氏の作品

3. 創作活動施設に関する考察

本計画の参考となる、自然景観を活かした創作活動施設の事例 5 つを取り上げ、創作活動を行うために必要な、構想の場、創造の場、発表の場、交流の場による施設構成に着目し調査、分析を行った。円形の流れ、8 の字型の流れといった創作活動の諸機能を抽出した（**図 3, 4**）。

図 3　個人で行う創作活動（円形）

図 4　複数で行う創作活動（8 の字型）

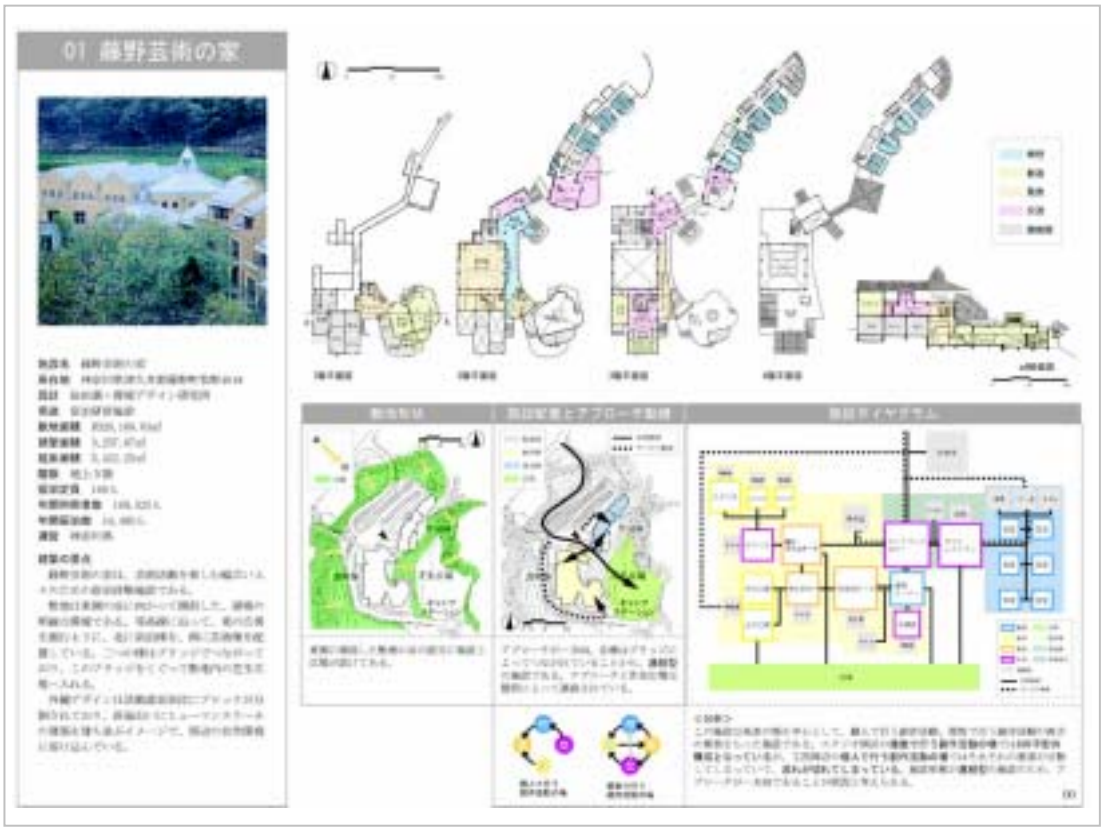

図 5　事例分析図 例

4. 稲荷山クラフトパークの計画

川村家住宅の歴史的価値や佐久市との合併による文化事業に合わせて、川村家住宅を含む稲荷山公園内を敷地とした、工芸活動を楽しみ、学ぶための創作活動施設を計画した。

4-1 全体計画

川村吾蔵記念館のアクセスが悪いことや、メインの駐車場が、稲荷山公園入り口側になってしまうことから、ループによって施設や広場が互いにつなげた。ループは所々に太いところ、細いところがあり、人の動きを促す仕掛けになっている。ループ沿いや公園内の道沿いには、自然物をテーマにした東屋が配置されていて、稲荷山の自然を鑑賞することができる。また、川村家から稲荷山への古い道も復活させた。稲荷山公園から記念館へのアプローチは（**写真 5**）、ループと創作棟により導かれる。創作棟の入り口は、記念館へと導く円弧を描いた階段への、入り口も兼ねていて、階段を降りいくと、記念館までの 16m の直結エレベーターがあり、記念館や稲荷山を眺めることができる。

4-2 川村吾蔵記念館（発表棟）

川村家住宅は、母屋と蔵の２本の軸線に基づいて構成されている。これらをガイドラインとして新しい建物を配置し（**写真 6**）、施設内で時代の流れを感じさせるようにする。また、新設部分は隣接する門と高さを揃えることで、新旧部分が解け合うようにした（**写真 7**）。しかし、門と新設部分の交わる箇所は、新設部分を直角に切り落とすことで、互いを強調させ、時代の流れの中に、アクセントを持たせた。新設部分の南側は、木ルーバーとスリガラスで作られているため、南より柔らかな光が注ぐ（**写真 8**）。また建物は、すべて中庭に面して開けているため（**写真 9**）、来館者同士の活発な交流が中庭で行われることを期待したい。記念館は、基本は吾蔵氏の作品の常設展示であるが、創作活動施設の発表棟を兼ねることから、間取りやしつらえを活かした諸空間の配置を行うことで、様々なイベントにも対応可能となっている。

4-3 創作棟

創作棟は、川村吾蔵記念館へのアプローチを強める装置となるため､稲荷山の地形に添わし、公園内ループと共に、川村家住宅を意識させる形態をとっている。創作棟の斜面に面している側は、スロープになっていて、また斜面は展示空間となっているため、展示作品を眺めることができる。斜面に向かって開けているため、稲荷山の自然と創作活動のための諸空間が、一連の流れを持って、一つの空間になっている。

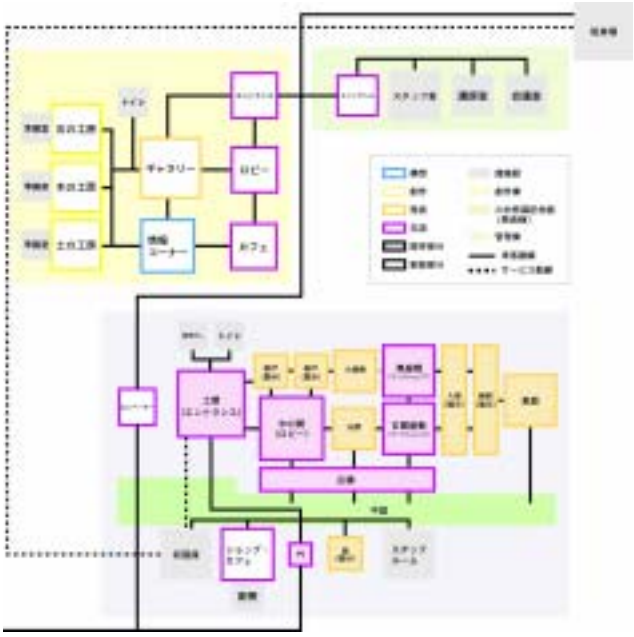

図 6　施設ダイヤグラム

写真 5　公園から記念館へのアプローチの様子

写真 6　記念館全景

写真 7　ファサードの様子

写真 8　新設部分の様子

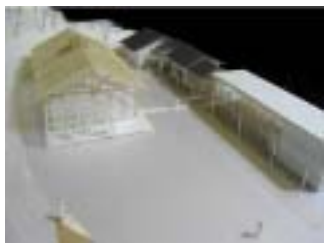

写真 9　中庭の様子

5. まとめ

本計画は、稲荷山という、象徴的な場と川村家住宅という歴史的価値のある古民家を創作活動施設として再生活用することで、人が集い、交流する場の提案を行い、周辺地域の活性化をはかった。

写真 10　石の東屋

図 7　全体計画図

図 8　展望広場からの眺め

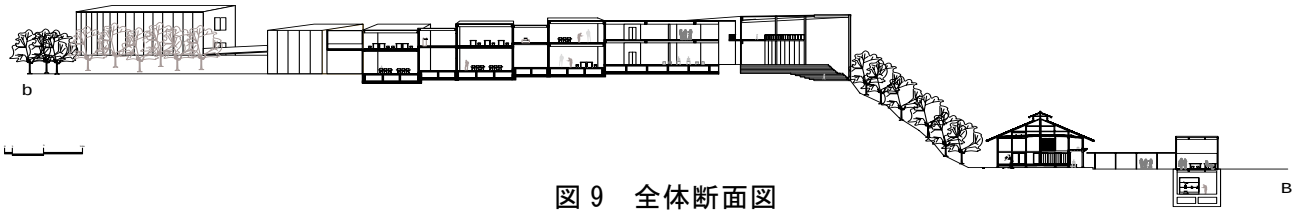

図 9　全体断面図